千刈狸の呟き

～ 狸の蕎麦談義 ～

タヌキソバ

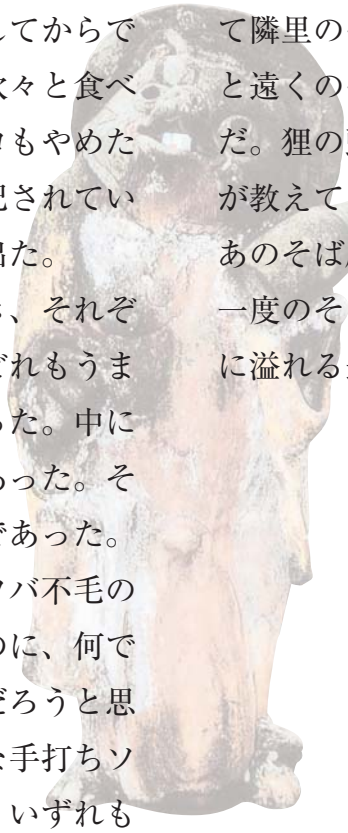
もりだかけだと、世の中蕎麦（以下そば又はソバ）の話でもちきりであった。うまい・安いの話ではなく、そば屋の主に何か企みがあって、よからぬ細工をしたのではないかと言う。忖度ではなく詮索のようだ。狐も狸も出て来ない。そばの話と言うのに失礼ではないか。そもそも、店の主と客が、狐と狸であるらしい、それなら合点もいく。

そばと言えば、学狸だった頃、学業のよりは、酒道とソバ道を御指南してくれた師狸がいた。以来、ソバ好きを認じている。未だソバ通ではない。怠けながらの修行中である。初期の修行時代は師狸がそばの本拠地へ巣穴換えをしてからである。便りが届き、そば屋を次々と食べ歩き、ソバ道に開眼し、タバコもやめたとあった。君も来てごらんと記されていたので、いそいそとそば旅に出た。

２日間で５軒のそば屋を歩き、それぞれ微妙に味わいが違ったが、どれもうまかった。全て師狸の奢りであった。中に１軒、深く印象に残った店があった。それまで食べたソバとは、格段であった。

東北の中でも秋田は、長くソバ不毛の地であった。うまい米があるのに、何でそばなんぞという土地柄なんだろうと思っていた。狸の里にまっとうな手打ちソバ屋が４軒競った頃があった。いずれも好ましい店で、主同士は競う気はなく、自分の思うソバに専念していた。その中でひと際異彩を放っていたのが荒挽十割を看板にしていた店であった。ニューウェーブと言われるソバの流儀で通う程に至福を味わった。主の健康状態を知った狸は、１ヵ月に１回は食べに行った。もっと行きたかったが、あまりに頻回だと変に勘づかれてもと思い我慢をした。しかし、とうとう亡くなった。涙が出た。おそらく、狸が食べた最高のソバだった。狸の我里に日本で最高のそば屋があった。

狸の周りにはそば好きが多い。そば話をしているうちに、評判のそば屋、そして隣里のそば屋へ行った。やがて、もっと遠くのそば屋へも行こうかと話は弾んだ。狸の頭にあったのは、その昔、師狸が教えてくれた中で一番印象に残った、あのそば屋である。こうして２～３年に一度のそば旅道中が始まった。珍談奇談に溢れる道中噺はまたいつか。



【発行所】一般社団法人 由利本荘医師会（毎月１回発行）　【医師会HP】http://honyui.jp/
由利本荘市水林456-4 TEL0184㉒4085